
猫はコタツで丸くなる

水橋 哩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫はコタツで丸くなる

【Nコード】

N3834Z

【作者名】

水橋 哩

【あらすじ】

コタツ・ファンタジー

ブローグ

我が家のコタツからは色々なモノが出てくる。

昨日は、火焰式の縄文土器が出てきた。そこそこ無難な物で助かった。47cm砲の砲塔の先端部分がコタツ布団の端から出てこようとしていたから、慌てて押し戻したのは先週のことだったっけか。このコタツを通して、あまりに沢山のモノと出会ったから、最近は大抵のことでは驚かなくなった。

今日も、ミカンのピラミッドを押し戴いたこの場所で、両手をその脇に投げ出してくつろぐ。ピラミッドの上に、私の黒髪が覆いかぶさる。染めるのも、切るのも面倒だから、大分伸びた。

そうして、午後11時00分。毎日、気だるくテレビの画面を見るのはこの時間と決まっている。いつもと同じニュースが流れる。内容もさして変わらないから、左から右へと情報も流していく。

結局、私にとって有益な情報なんか無い。

必要なものは、全てこのコタツから。願えば何でも出てくる。労働の汗もいらぬし、精神を擦り切らす必要も無い。だから、私がこのニュースからは何も得る必要が無い。あるとすれば、出演中の局アナの持つ美貌位だろうが、それすらも望めばこのコタツから出てくるだろう。

本来、無形であるはずの情報すら、この赤茶けた布団と床の隙間から出てくる。脳細胞に直接アクセスされる電気的な感覚に最初は慣れなかったが、今では快い感覚だ。それこそ、土曜日の朝、布団の中でのまどろみに似ているような気がする。

こうやって、寝そべってさえいれば、私は幸せだった。
全ての欲求はコタツが叶えてくれていた。

しかし、まあ、なんというか…。

別れってのは突然来るものなのだな。

つづく。

どうにでもなるだろう。ジンセイなんて（１）

気だるくて、微熱があるようだ。

「死にたい」

こう呟いておけば、なんだか気持ちが楽になる。

人前で呟くのはアレだし、あんまり多用する言葉ではない。ネガティブな言葉は概して社会には受け入れられないものだ。

時計は午前６時半を廻っている。そろそろ布団から出なければ、きつと今日も「遅刻」する。

朝から気まずい思いをするのは嫌だけれど、ここから出るのを躊躇するのはきつと万国共通だろうね。もう少し、もう少しと粘っていたら、だんだんココロに黒いのが近づいてくる。

結局、思い切って楽園を出るしかないのだ。

つい半年ほど前まで大学生だった楓は、この就職大恐慌の中で、運良く地元の会社に就職した。

あがり症の楓は、何だかんだで、面接大苦戦だったけれど、何故かこの会社での面接は上手に出来た。その前に受けた、１対７の圧迫面接が功を奏したのかもしれない。やけに細長い会議室での光景は一生モノのトラウマである。

「あなたがこの会社でやりたいことは何ですか」

面接官、お決まりの台詞。

（そんなもの或る訳ないじゃない）

自らの素直な心の通りに答えたら駄目なこと位は知っている。そんなにバカではない。

「私は、御社で…」

ここまで喋って頭が真っ白になった。つい１５分前まで、繰り返した呪文はどっか行った。

（私も逝った…。）

まさに、失敗のお手本だった。

楓が記憶しているのここまでだ。

それから後は、モヤモヤした視界の中で、ひたすら中傷されていたような気がする。

はつきり思い出そうとすると、有難いことに海馬のサーキットブレイカーが発動してくれる。思い出した時点で、悶え死ぬことは確定だろう。死ななくつても、腹を十字に割腹し、見事に最後を遂げてみせる自信がある。

そんな大事故の直後だったから、上手く行ったのかもしれない。

(…いや、上手く行き過ぎた)

元来、社交的でないはずの楓が、どうして流れるように喋ることが出来たのかは、今でも謎だ。

何しろ、普通に話しているだけなのに、面接官は大爆笑。終始和やかな雰囲気で、恙無く面接は終わった。

今、考えてみると、そんなに難しいことは尋ねられなかった。仕事のことを訊かれた覚えは無い。

それに、楓自身、半ばヤケクソで受けた面接だったから、無駄な気負いも無かったのかもしれない。

そんなこんなで、楓は1人の大学生から、地元の1人の新入社会人にジョブチェンジしたのだった。

考えてみれば、これが全てのハジマリであった。

どうにでもなるだろう。ジンセイなんて（２）

何しろ、指示されていることがまったく理解できないのだ。

もつとざっくり言えば、言っていることがチンプンカンプンで、さっぱりなのです。

必死にやろうとすればするほど、楓の行動はますます奇怪な側に落ちていく。普段出来ていることまでも、何故か出来なくなってしまう。

この前は、目で釣銭を確認したにも関わらず、１００円多いお釣りを要求して、社長に呼び出しを喰らった。

「どうしてそんなことも出来ない」

（いや、私にも解らないですよ）

…とは言えず、楓は黙っているしかなかった。

「下手に喋ると、なんだかボロを出してしまいそうだった」なんていう狡賢い余裕は彼女には無かった。

彼女は極端にこういう場に弱かった。とにかくメンタルが弱かった。もう弱いなんてもんじゃない。こういう場になると、楓はいつも黙りこくってしまった。

いずれにしろ、自分が怒っているのに相手が黙ってしまえば、基本的に誰でもフラストレーションが溜まってくる。

この場合の社長も常識の例外の人ではなく、黙ったままの楓に対して、煮えたぎるそれを確実に溜め込んでいった。

「君は、この仕事に向いていないんじゃないか」

（じゃあ、採用したのは誰だよ）

「どうして電卓を左で打つんだ。右で打ちなさい、右で」

（そうやって打てばいいと、金出して買った本に書いてあったんですよ、コノヤロー）

そんな木霊が十数分、２人の会議室に響いていた。

最後に、社長は、

「身の振り方を考えておけ」

置物になった楓に向けて、赤くなった社長はそう言うと、会議室の扉を無造作に閉めて出て行った。

しばらく、楓はそのままだった。

真っ白になった脳細胞の活動が復旧するのには、それなりの時間が必要だった。

黙って、自分の中を見つめる。

何も無い白い空間と黒い闇の空間が交叉しては渦巻く。

考えがまとまらない。

結局、私は何も出来ない、無能で馬鹿なうすのろだという現実と向き合うしかなく、黒いほうが幾分勝ってしまう。

真っ白なはずの私の人生は、もつとす黒く染まり出したようだ。

（もう終わった。逝ったな）

そういう風に置物が考えていると、再び社長が会議室に入ってきて、言った。

「いつまでそうしている。早く仕事に戻れ」

私はもう真っ黒になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3834z/>

猫はコタツで丸くなる

2011年12月21日21時48分発行